

第4学年 社会科学習指導案

単元名「きょうどにつたわるねがい」

～用水を開いた人～（全9時間）

1 単元について

朝日町は、飛騨の南東部に位置する山間の町である。ここに住む人々は豊かな森林資源や清流飛騨川の恩恵を受けて暮らしている。町は飛騨川とその支流を中心に拓け、水田が広がる農村地帯となっている。しかし、明治の初め頃までは耕地の7割以上を畑が占め、わずかに谷の水を引いての稲作が細々で行われているのみであった。人々は稗を主食とし、ひとたび干ばつともなれば多くの民が飢餓に苦しみ餓死者も多くあったという。

そんな村の生活を少しでもよくしたいという人々の願いは、明治時代各地域ごとにさかに行われた用水事業に現れている。しかしたび重なる難工事に見舞われ、破産したものさえあったと記録されている。

本単元では、岩瀬用水を開いた岩本良雄という人物を通して、地域の人々の生活の向上に尽くした先人の働きや願い、苦心を考えさせたいと思う。子どもたちは朝日町を豊かな自然に恵まれ、人々があたたかい町だと認識している。しかし、今の豊かな町ができたのは、先人のおかげであるということあまり意識していない。朝日町に生まれ育ちながら、地域を支えてきた先人の苦心については知らないことが多いようである。そのことに気づかせ、地域に対する愛情を深め地域の発展を願う気持ちを育てるために大切な単元であると考えます。

2 単元の目標

- (1) 地域の地理的環境、人々の生活の変化や地域の発展に尽くした先人の働きについて関心をもち、それを意欲的に調べることを通して、地域社会に対する誇りと愛情をもととする。（関心・意欲・態度）
- (2) 地域の人々の生活の変化や地域の発展に尽くした先人の働きから学習の問題を見いだして追究・解決することで、地域の人々の生活と願いを実現していく工夫や努力を考え、適切に判断する。（思考・判断）
- (3) 地域の発展に尽くした先人の具体的事例を聞き取り調査や各種の資料を活用し調べる

とともに、調べたことを工夫して表現する。
（観察・資料活用の技能・表現）

- (4) 地域の人々のくらしの変化や人々の願い、地域の人々の生活の向上に尽くした先人の働きや苦心を理解する。（知識・理解）

3 研究と関わって

(1) 指導計画、単元構成の工夫

ねらいにせまる人物の教材開発

岩瀬用水は、岩本良雄という人物が父の代からの用水事業を引き継ぎ、長い年月をかけて開いた用水である。3度にわたる軍役召集、岩盤掘削などの難工事、地域の人々の理解を得られず進めた単独での工事、500円もの大金の負担など苦心の末、岩瀬用水を完成させたのである。地域の人々の生活が少しでもよくなることを願って、地域のために尽くした良雄の業績を調べ考えることで、今の朝日町があるのは先人の努力の上に成り立っているものだという事を知り、さらに朝日町に対する愛情を深め、朝日町の発展を願える子どもを育成したいと考える。

また、米作りを行っている人たちに用水の役割を聞き取ることで、良雄が作った岩瀬用水が、今の私たちの生活にも多大な恩恵を与えているということに気づかせたいと思う。

社会的事象の意味をとらえる指導計画の作成・単元構成の工夫

単元を貫く課題を「朝日町には飛騨川や谷川があるのに、なぜ用水が作られたのだろうか」とし、用水が作られた歴史や用水を利用している人たちの思いを聞く中で、ねらいにせまられるようにした。

また単元の核となる授業(本時)を位置付け、それに向けて各時間の役割を明確にした。本時第8時の学習に、第1時から第7時まで学習してきたことが生かせるような単元構成をめざした。第1時から第3時は、用水の人々への恩恵を理解するために、現在に残る用水を見学する時間とした。第4、5時は、用水の必要性を理解するために、用水作りが始まる前の村の暮らしを調べたり体験したりする時間とした。第6、7時には、本時に向けての必然性をもたせるために、岩瀬用水がどのように作られたのかを理

解する時間とした。それらの既習事項をもとに、本時の課題追究が深まりのあるものになるような単元の構成を行った。

(2) 学習活動の工夫

ねらいを明確にした学習活動の工夫

本時は長い年月をかけ大変な苦心までしているのに、尚も用水作りに取り組み続けた人物岩本良雄を取り上げ、これほどまでに大変なのに用水作りをあきらめることなく進めたのはなぜだろうという、ねらいにせまるための課題が生み出されるよう設定した。用水作りは、地域の人々や子孫のためをも思ってされたという本時のねらいに近づけるような資料や発問を準備した。まず、既習事項から個人追究を行う。練り合いの場面では、自分の考えを発言する時に、常に課題に立ち戻って話をさせるようにし、ねらいの焦点化を図りたいと考える。学習のまとめの記述は、「みんなのため」「子どもや孫のため」というキーワードを示すことで、ねらいに即したまとめができるようにしたい。

仲間と練り合う交流活動の工夫

本時に至るまでに、用水が作られる前は、食べるものにも困るほどの貧しい生活だったことや現在の米作りが用水の恩恵に預かっていることや岩瀬用水が完成するまでの工事の様子を学習してきた。そのことが授業の前半の足場となって、良雄が苦心して用水を作ろうと考えたのは、米を得るためだったこと、父の意思を引き継ぎたいということ、二つの考えが出るだろうと考えられる。

さらに「耕地面積の変化の資料」や「米の収穫量の変化の資料」を提示する。この資料から良雄が苦心をして用水を作ったのは、米の収穫量を増やすためだったということ、人々の生活が以前より豊かになったことが検証される。

しかし、これだけではなぜ用水を作ったのかという事実認証にしかすぎない。本時のねらいは、良雄が困難な中、用水事業をあきらめなかったのは、地域の人々の暮らしをよくすること、さらに先々の人々の暮らしをもよくするという地域の発展を強く願っていたということを考えられるようにしなければならない。そこで「良雄が用水作りをしたのは、いったい誰のためだ

ったのか」ということを考えさせたいと思う。この発問に対して子どもたちは、食べるものにも困っている地域の人々のためだと考えると思われる。さらには、「用水作りのために準備した大金で米を買った方が苦労しなくてすむのではないか」という発問をなげかけることで、今だけでなく先々の人々のことをも願っていたという考えまで練り合えるようにしたい。

最後に現在米作りをしており、用水の恩恵を受けている人の話を資料として提示する。この話から、良雄が大変な苦心をして作った用水のおかげで、今のような豊かな朝日町があるという考えを引き出す練り合いにつなげたい。

(3) 指導・援助、評価の工夫

調べ考える指導・援助の工夫

岩瀬用水の年表から、工事を始めてから完成するまで何年かかったか着目させることで、課題意識がもてると考える。用水ができる前は米を作ることができず、飢えで苦しむ人が多かった資料に着目させたり、稗を食べたことや水くみをしたことなど、自分たちが体験した時のことを思い出し語らせたりすることで、なぜ用水作りをあきらめなかったのかという考えをもたせたい。さらに用水を作ったのは、みんなのため子どもや孫のためだという意見に対しどう思うかを問うことで、考えを深められるようにしたい。提示資料が読みとれない児童には、個別指導をして一緒に考えさせていきたい。また、構造的な板書にし、子どもたちの発言を位置付けたり、出された意見を図でつなげることで、視覚的に理解できるようにしたいと考える。

学びを確かにする相互、自己評価の工夫

課題提示直後に自分の考えをノートに書かせ、授業の最後に学習のまとめをノートに書かせることで、自己の考えの高まりや変容を認識させ自己評価としたい。また、自己評価カードを使い本時のふりかえりをすると共に、次の授業の励みにさせたい。

仲間の意見を自分の意見と比べて聞き、声に出して反応することで評価を伝え、相互評価としたい。また、教科係が授業の始めに学習の目標を言い、授業が終わったところで、評価するようにしている。